



2002

Leipziger Barockorchester

und

**Geistlicher Musik Chor Sendai
Morioka Bach Kantaten Verein
Okayama Bach Kantaten Verein
Kochi Bach Kantaten Verein**

ライブツィヒ・バロックオーケストラ

Leipziger Barockorchester

指揮・Cembalo / David Timm

音楽監督・合唱指揮 / 佐々木 正利

NN
SEBASTIAN
BACH

2002 10/2 水 19:00 開演

仙台市青年文化センター・コンサートホール

▽第11回 仙台市芸術祭

仙台宗教音楽合唱団 第26回演奏会

■主催 / 仙台宗教音楽合唱団

■助成 / 財団法人仙台市市民文化事業団

■後援 / ドイツ連邦共和国大使館・(財)宮城県文化振興財団・河北新報社・朝日新聞社仙台支局・産経新聞社東北総局・毎日新聞社仙台支局・NNN 仙台放送局

2002 10/4 金 18:30 開演

盛岡市民文化ホール・大ホール



■主催 / 盛岡パッハ・カンタータ・フェライン IBC 岩手放送

■後援 / ドイツ連邦共和国大使館・岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・(財)盛岡市文化振興事業団・岩手県合唱連盟・岩手日独協会・岩手日報社・盛岡タイムス社・毎日新聞社盛岡支局・朝日新聞盛岡支局・読売新聞社盛岡支局

2002 10/6 日 15:00 開演

岡山シンフォニーホール

■主催 / 岡山パッハカンタータ協会

■共催 / (財)岡山シンフォニーホール

■助成 / 福武文化振興財団

2002 10/7 月 19:00 開演

高知県立美術館ホール

高知県芸術祭参加行事



■主催 / 高知パッハカンタータフェライン

■後援 / 高知新聞社・朝日新聞高知支局・毎日新聞高知支局・NNN 高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・高知ケーブルテレビ・エフエム高知

ごあいさつ

音楽監督・合唱指揮・テノール

佐々木 正利



1980年5月、私は東独(当時)ライプツヒにいました。念願のバッハ・コンクールを受けるためにです。4年に1回、丁度オリンピックイヤーに開かれるこのコンクールは、世界のバッハ演奏家の登龍門。自分の歌になかなか自信をもてず、それまでコンクールをことごとく敬遠してきた私でしたが、バッハ・コンクールだけは絶対受けたと思っていました。何故なら、年も30になろうかという私、そろそろ一生の身の振り方を決定すべく、バッハ歌手として立ち行けるか、その証しを求めようとしていたからです。ところが、コンクールに年齢制限があることをうっかり見逃し(見過ごし)、次回は出場資格がないことを知って慌てふためいて渡独したものでしたから、準備万端とは到底いかず、特にドイツ語に関しては出たとこ勝負の体、誠に不安いっぱい挑戦となりました。ところがです。こんな私をライプツヒのバッハ継承者たちは、実

に温かく迎えて下さったのです。声楽部門の審査委員長を務められた、時のトーマス・カントールH. J. ロッチュ氏、予選のピアノ伴奏を担ってくれたブフォイファー教授(メンデルスゾーン音楽大学)、本選(BWV55)でのオケ、ケヴァントハウス室内管弦楽団、そして終曲コラールを歌ってくれたトーマス教会聖歌隊の面々。実に気さくに私の緊張感を柔らげて下さり、まるで旧知の間柄のように共に喜びの中にバッハ演奏を繰り広げていったあの感動が、今なお鮮明に、私の記憶の中に息づいています。

あれから21年経った昨年の夏、私は再びライプツヒにいました。岡山バッハ・カンタータ協会の公演のためにです。そう、昔憧れをもって訪れたバッハの聖地、トーマス教会での演奏会が今実現しようとしているのです。エコノミック・アニマルと言われて久しい日本人の合唱団が、度々トーマス教会を借り上げて演奏会を開いているのは、多くの悪評と共にドイツ人には知れ渡るところ。しかし、私たちは違うのです。岡山のみなさんが長年に亘って積み重ねてこられた実績、又御縁があって、何といつもならトーマス教会聖歌隊が担当する土曜日の夕べの演奏会に、代替出演するという栄誉に浴したのです。従って当然のこと、バスのペーター・コーイをソリストに迎え、ダーヴィット・ティム率いるライプツヒ・バロックオーケストラとの共演と相まりました。そこでの演奏は想像以上に感動的なものでした。勿論、あのバッハ自身が実際に立っていた教会後部の2階演奏席に足が震えたのも事実でしたが、ティム氏のタクトから繰り出される音楽の、何と正統的で躍動感溢れる世界よ。更にオケのメンバーの真摯で、しかも音楽を楽しむその表情が、また素敵なのです。私自身も合唱に加わり、いよいよソロの段になって、ふと20年前の記憶が甦って参りました。そう、あの時も、何の違和感もなく、共に手を携えてバッハを享受したなあ。そして今この時も、目の色さえ違え、同じ視線で、同じ気持ちでバッハに对峙しているなあ。それだけではありません。昔もそうでしたが、今のライプツヒの人たちも、音楽だけでなくすべての面で私たちを歓迎し、お世話下さったのです。この気質(かたぎ)は何なのでしょう。武骨で決して人目には愛想よくは映らないドイツ人の、本当の優しさ、温かさに再び触れ、私たちの心も、ライプツヒの夕焼けに合わせて、ほのぼのと暮れなじんでいきました。

昨年のライプツヒ行は、岡山のみなさんの御好意により、仙台・盛岡の合唱団のみなさまも同行させていただきました。今回、あの感動を再び、ライプツヒ・バロックオーケストラを日本に招聘することができ、関係御各位には心より感謝申し上げます。思えば、これだけ優れた本場のオケが初来日というのも不思議な話ですが、却って商業ベースに乗らない真の音楽交流ができたものと、心ひそかに自負しております。先の3地区に高知を加えた4団体は、音楽に対峙するに志を同じくする仲間ですが、ティム氏の真摯なタクトに操られ、生き生きと音楽してくれと信じています。今宵は1万キロメートルものかは、ドイツと日本、いや地球人として、人類最大の遺産バッハの音楽を共に楽しみたいと思います。

プロフィール

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。1973年にバッハ・クリスマス・オラトリオの福音史家で楽壇デビュー。79年ドイツに渡り、80年第6回ライプツヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より82年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に80年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP・シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。帰国後も世界、日本の著名オーケストラのソリストとして起用される。また世界的バッハ指揮者であるH. ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハ・ゾリステンの演奏会を初め、幾多の演奏会に出演して信頼を勝ち得ている。85年ザルツブルク音楽祭に招かれ、バッハ・マニフィカト等で絶賛を博した。現在までリサイタル21回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

70年東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進

を育てるとともに指揮者としての活動を開始。以後、約30年にわたって主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団等を率いての7度にわたるドイツ公演では『シュツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載される。94年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞(学芸部門)が贈られ、00年8月にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。岩手大学教育学部音楽科教授。二期会会員。グルッペ・ベッヒライン会員。日本声楽発声学会理事。日本発声指導者協会常任理事。仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者。仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。オーケストラ・アンサンブル・金沢合唱団指揮者。

仙台市青年文化センター・コンサートホール

10/2 (WED)

合唱／仙台宗教音楽合唱団

G. Ph. テレマン
ヴァイオリンとトランペットのための協奏曲 ニ長調

Solo/Tp 島田 俊雄

J. S. バッハ
ミサ曲 イ長調 BWV234

Solo/Sop 藤崎 美苗
Alt 佐々木まり子
Ten 佐々木 正利
Bas 佐々木 直樹

J. S. バッハ
ブランデンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 BWV1050

J. S. バッハ
カンタータ 第45番 BWV45
(あなたには告げられています、人よ、何が善いものであるか)

Solo/Alt 佐々木まり子
Ten 佐々木 正利
Bas 佐々木 直樹

盛岡市民文化ホール・大ホール

10/4 (FRI)

合唱／盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

G. Ph. テレマン
ヴァイオリンとトランペットのための協奏曲 ニ長調

Solo/Tp 島田 俊雄

J. S. バッハ
カンタータ 第45番 BWV45
(あなたには告げられています、人よ、何が善いものであるか)

Solo/Alt 佐々木まり子
Ten 佐々木 正利
Bas 佐々木 直樹

J. S. バッハ
ブランデンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 BWV1050

A. ヴィヴァルディ
グロリア ニ長調 RV.589

Solo/Sop 藤崎 美苗
小野寺 貴子
Alt 佐々木まり子



岡山シンフォニーホール

10/6 (SUN)

合唱/岡山バッハカンタータ協会

J. S. バッハ

カンタータ 第150番 BWV150

(主よ、わたしはあなたを求めています)

Solo/Sop	岡野	恭子
Alt	矢内	淑子
Ten	松本	敏雄
Bas	小原	浄二

J. S. バッハ

カンタータ 第45番 BWV45

(あなたには告げられています、人よ、何が善いものであるか)

Solo/Alt	脇本	恵子
Ten	松本	敏雄
Bas	小原	浄二

J. S. バッハ

ブランデンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 BWV1050

J. S. バッハ

ミサ曲 イ長調 BWV234

Solo/Sop	岡崎	順子
Alt	脇本	恵子
Ten	松本	敏雄
Bas	小原	浄二

高知県立美術館ホール

10/7 (MON)

合唱/高知バッハカンタータフェライン

G. F. ヘンデル

6つの合奏協奏曲 作品3より 変ロ長調

G. Ph. テレマン

3つのヴァイオリンのための協奏曲 ヘ長調

J. S. バッハ

ブランデンブルク協奏曲 第5番 ニ長調 BWV1050

G. Ph. テレマン

組曲 ハ長調「水の音楽ーハンブルクの潮の満干ー」

J. S. バッハ

カンタータ 第45番 BWV45

(あなたには告げられています、人よ、何が善いものであるか)

Solo/Alt	小原	仲枝
Ten	佐々木	正利
Bas	小原	浄二

(合唱指揮)

ライプツィヒ・バロックオーケストラ

1995年創設。以来、17、8世紀の管弦楽・室内楽の作品を高い水準で演奏してきた。古楽器(あるいは忠実に複製されたレプリカ)を使用し、バロック時代の音質を忠実に再現することと、生き生きとした別の解釈を付け加えることを目的として精力的な練習を重ねている。レパートリーにはテレマン、ヘンデルをはじめとした18世紀の作曲家およびJ.S. バッハの器楽音楽と声楽曲の多くが含まれている。

設立間もないオーケストラではあるが、ゲオルク・クリストフ・ビラーやダーヴィット・ティムの指揮のもと、ライプツィヒの声楽アンサンブルと共に、中部ドイツ放送局夏期音楽祭、トーマス教会でのバッハ・カンタータ・ツィクルスで演奏を行っている。他、J.S. バッハの管弦楽やカンタータ、オラトリオに対する歴史的様式解釈によって、ライプツィヒのトーマス教会や

様々な中部ドイツの演奏会場に招聘されている。また、ドイツ全土はもとより、ヨーロッパ全土に渡って演奏活動を続けており、ペーター・コーイ、クラウス・メルテンスなど、名高い歌手と共に仕事をするということにも重きをおいている。

98年9月には、ライプツィヒ・トーマス教会合唱団とともに、ゲオルク・クリストフ・ビラーの指揮で、新バッハ協会による第37回バッハ音楽祭に出演。バッハ・イヤーの2000年にも、引き続き参加している。同年3月には、ダーヴィット・ティムの指揮で、リプンエンス・カントール室内合唱団と、J.S. バッハの「ヨハネ受難曲」第2稿(1725年版)の演奏を主導。フランスへの演奏旅行も果たしている。発売されているCDは、カンタータ「わたしは哀れな人、わたしは罪の下僕 BWV 55」、「協奏曲イ短調 BWV 1044」など多数。

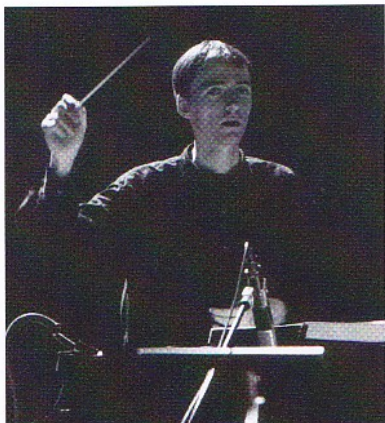
Violine	Konstanze Beyer Ulrike Wildenhof Thomas Graewe Beate Voigt Martina Rentzsch Eva Czermak Almut Krämer Cornelia Fiedler Margret Baumgartl
Viola	Florian Schulte Gundula Beyer Stefan Poetzsch
Violoncello	Stephan Schultz
Kontrabass	Achim Beyer
Flöte	Thomas Kügler Johanna Baumgärtel
Oboe	Stefanie Hägele Henriette Gröger
Fagott	Axel Andrae
Cembalo	David Timm
Orgel	Christiane Bräutigam





ダーヴィット・ティム (David Timm)

コンダクター



1966年、ドイツ北東部のミューリッツ湖畔・ワーレンに生まれる。

ライプツィヒ・トーマス教会合唱団に入団し、ハンス・ヨハヒム・ロッチェのもとにて第1序誦者になる。

89年から95年までライプツィヒ国立音楽大学で教会音楽を学び、ハルネス・ケストラー、アンヴィット・ガストにオルガン、フォルカー・ブロイティガムに即興演奏、ヴォルフガング・ウンガーに合唱指揮、フォルカー・ローデにオーケストラ指揮をそれぞれ学ぶ。ライプツィヒのマルクス・トマシュのもとで、ピアノのマスタークラスに参加し、教会音楽のA級国家資格を取得。

その後、96年から97年にはザルツブルク・モーツァルテウム音楽院にてカール＝ハインツ・ケマーリングに学ぶ。

91年、ワイマール・ピアノ即興コンクールに優勝。

97年、シュヴェービッシュ・ゲミュントの第5回国際オルガン即興コンクールに優勝。

98年、ライプツィヒの若いジャズ演奏

家のための奨学金を得る。

98年から、ライプツィヒ国立音楽大学でオルガンの即興演奏を、ハレ国立音楽大学で教会音楽の合唱指揮、オーケストラ指揮を教える。

99年から、ゲオルグ・クリストフ・ビラーの後を継いで、ライプツィヒ・ヴォーカル・アンサンブルの音楽監督を務める。

現在、メンデルスゾーン室内オーケストラ、ライプツィヒ・バロックオーケストラ、中部ドイツ放送カンマー・フィルハーモニーなどを指揮する他、ピアニスト、オルガニストとして国内外を問わずに多彩な演奏活動を行っており、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会にソリストとして出演している。

CD録音もクラシック（オルガン、指揮）からジャズ（オルガン、ピアノ）まで数多く行っている。

ちなみに、1985年に聖トーマス教会合唱団の団員として初来日し、2001年にはオルガニストとして2度目の来日をしている。

コンスタンツェ・ベイヤー (Konstanze Beyer)

コンサートマスター



ライプツィヒのフェリックス・メンデルスゾーン・バルソルディー音楽大学にて、著名なゲルハルト・ボッセ教授のもとヴァイオリンとヴァイオリン教育学を学ぶ。在学中からバロックヴァイオリンの演奏に興味を持ち始め、バロック奏法を習得すると共に、18世紀音楽の演奏スタイルを身につける。

ライプツィヒの古楽器奏法を用いた新しい演奏家世代として彼女は先駆者の1人であり、1995年以降、ライプツィヒ・バロックオーケストラのコンサートマスターと

して活動を始め、1998年からは音楽監督を務めている。また、コンサートマスターのかたわら室内楽アンサンブルやソリストとして活躍し、多くの放送やCD録音を残している。古楽器奏者としての活動の一方、シュテファン・ポエシェ・アンサンブル・エルラーゲンに所属し、現代音楽の演奏活動も行っている。



島田 俊雄 (Shimada Toshio)

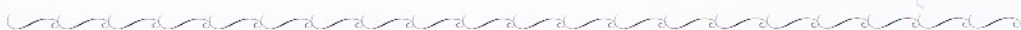
Tp (仙台・盛岡)

埼玉県浦和市に生まれる。群馬大学教育学部卒業後、東京芸術大学大学院入学。トランペットを中山富士雄、杉木峯夫の両氏に師事。

在学中、第1回日本管打楽器コンクールトランペット部門第3位に入賞。1985～87の3年にわたり「芸大メサイア」演奏会のトランペットソリストを務めた。第2回バリオ市主催モーリス・アンドレ国際トランペットコンクールに、日本人として初めて第4位となる。

同大学院修了後、札幌、前橋、浦和、東京（東京文化会館）にてリサイタルを開き好評を博した。

現在、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団・トランペット奏者。東京バッハトランペットアンサンブル主宰。東京ミュージック&メディアアーツ尚美講師。東京芸術大学管弦楽研究部講師。東京バッハトランペット研究会代表。日本トランペット協会常任理事。近年、楽器の製作も手掛け、自作の楽器によるバロック音楽の演奏には定評がある。



藤崎 美苗 (Fujisaki Minae)

Sop (仙台・盛岡)

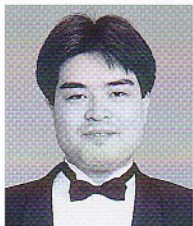
岩手大学教育学部卒業、東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、瀬山詠子、朝倉蒼生の各氏に師事。また東京芸術大学在学中にバッハ・カンタータ・クラブにおいて小林道夫氏の指導のもと研鑽を積む。第10回友愛ドイツ歌曲コンクールにおいて第2位入賞。これまでにJ.S.バッハの教会カンタータ、「ヨハネ受難曲」、「ミサ曲口短調」、「クリスマス・オラトリオ」、ヴィヴァルディ「グロリア・ミサ」、M.ハイドン「レクイエム」、モーツァルト「レクイエム」、メンデルスゾーン「エリア」、フォーレ「レクイエム」、サン・サーンス「レクイエム」など多くの宗教曲でソリストを務める。京葉混声合唱団、コーロ・プリランテ、志木第九の会、みずほ銀行合唱団、横浜ルミナス・コール各ヴォイストレーナー。



佐々木 まり子 (Sasaki Mariko)

Alt (仙台・盛岡)

東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程独唱専攻修了。毎日学生コンクール西日本1位。NHK新人演奏会出演。伊藤亘行、小林道夫、森明彦の各氏に師事。1980年にデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、ヘルムート・クレッチマル、ハンス・クールマン両教授に師事。ドイツ・リート、オラトリオ歌唱法並びにドイツ語舞台発音法の研鑽を積む。その間、北ドイツを中心にバッハをはじめ数多くの宗教音楽、歌曲演奏会に出演。帰国後も、H.ヴィンシャーマンとバッハ「クリスマス・オラトリオ」で共演したのははじめ、バッハ、ヘンデルのカンタータ、オラトリオ演奏会に多数出演。温かく豊かで深みのある歌唱によって、東京を中心に、全国各地で活躍している。近年は全日本合唱連盟主催の「おかあさんカンタート」にて、発声講座の講師を務める。また、月が丘教会のチャペルコンサートを長年企画・指揮している。現在、女声合唱団グレイセスもりおか、アンサンブル・コン・フォーコ指揮者。東北大学混声合唱団、岩手大学合唱団、各ヴォイストレーナー。グルッペ・ベッヒライン会員。



佐々木 直樹 (Sasaki naoki)

Bas (仙台・盛岡)

岩手大学教育学部音楽科卒業後、東京芸術大学声楽科を経て、現在同大学院修士課程に在学中。声楽を小原一穂、佐々木正利、佐々木まり子、伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。これまでに、J.S.バッハのカンタータ、ミサ曲、クリスマス・オラトリオ、ヨハネ受難曲、ヘンデル「メサイア」、サン・サーンス「レクイエム」、モーツァルトのミサ曲など、宗教曲を中心にソリストとして活動している。01年芸大定期メンデルスゾーン「エリア」においてソリストを務める。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベッヒライン会員。



小野寺 貴子 (Onodera Takako)

Sop (盛岡)

県立盛岡北高等学校卒業。岩手大学教育学部中学校教員養成過程音楽科に入学、佐々木正利氏に師事する。同氏の下、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインにおいて宗教音楽を学ぶ。1999年同大学院音楽専修に入学。2000年、東京芸術大学大学院に入学、声楽を三林輝夫氏、発声を磯貝静江氏に師事する。また、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブ定期演奏会においてソロを務めるなど小林道夫氏の指導の下研鑽を積んでいる。現在修士課程3年在学中。また、01年10月には東京芸術大学第47回オペラ定期演奏会「ドン・ジョバンニ」にツェルリーナ役で出演し好評を博した。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、グルッペ・ベッヒライン会員。東京家政大学「フラウエンコール」、東京外国語大学「ソレイユ」ヴォイストレーナー。



岡野 恭子 (Okano Kyoko)

Sop (岡山)

作陽音楽大学卒業。菅谷省三、岡崎順子の諸氏に師事。又、H.クレッチマル、C.ブルコップフ、佐々木正利、岡田知子、木下基樹氏によるレッスンを受ける。倉敷芸文館一周年記念オペラ「魔笛」のクナーベ I でデビュー。岡山シンフォニーホール五周年記念オペラ「ワカヒメ」の女房役をはじめ、多数演奏会に出演し「魔笛」の夜の女王役等好演。宗教曲を中心に合唱ソロも務める。中国二期会準会員。



岡崎 順子 (Okazaki Junko)

Sop (岡山)

岡山大学卒業、愛知県立芸術大学大学院修了。金光武義、矢部礼子、小島琢磨、中山梯一、H.クレッチマルの諸氏に師事。バッハの教会音楽や、モーツァルトのミサ曲には定評があり、1990年ドイツ留学中、デットモルト他において、バッハ「クリスマス・オラトリオ」を歌い、好評を博す。またE.オッテンザマー(C1.)とシューベルト「岩の上の羊飼」を共演するなど、幅広いコンサート活動のほか、8回のリサイタルを開催する。オペラでは、中国二期会の公演を中心に、「フィガロの結婚」のズザンナ、「コシ・ファン・トゥッテ」のデスピーナ、「魔笛」のババゲーナ、「カルメン」のミカエラ、「夕鶴」のつう、「ラ・ボエーム」のミミ等を演じる。現在、岡山県立大学短期大学部教授、中国短期大学音楽科非常勤講師。中国二期会、岡山バッハ・カンタータ協会、日本演奏連盟会員。



矢内 淑子 (Yanai Toshiko)

Alt (岡山)

国立音楽大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修了。石田徹、西内静、井上貞一、木下武久、西内玲の各氏に師事。オペラ活動としては、「バステアンとバステアンヌ」、「魔笛」、「フィガロの結婚」、「コシ・ファン・トゥッテ」、「ヘンゼルとグレーテル」、「マープラ」、「海の子守唄」、「おこんじょうるり」、「うかれのひょう六機織唄」、「笠地蔵」、「ワカヒメ」、オペレッタ「もたろう」に出演。コンサート活動としては、E.オッテンザマー氏とシュポアー「6つのドイツ歌曲」を共演。バッハのカンタータ、ヘンデルの「メサイヤ」、ベルゴレージの「スタバート・マーテル」、ベートーヴェンの「第九交響曲」等々、数少ないアルトソリストとして、数多く出演。その他、ミュージカルの指揮や音楽指導など、アマチュアの合唱団の育成に情熱を注いでいる。

現在、旭川荘厚生専門学院教員、岡山大学教育学部、福山市立女子短期大学非常勤講師、瀬戸内混声合唱団、旭川荘ゆづり葉合唱団指揮者、中国二期会、岡山バッハ・カンタータ協会会員。

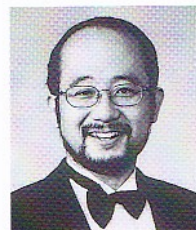


脇本 恵子 (Wakimoto Keiko)

Alt (岡山)

中国短期大学音楽科卒業、専攻科修了。近藤安个、中谷和子、岡崎順子の諸氏に師事。岡山県新人演奏会、中四国新人演奏会に出演。トリオリサイタル開催。バッハ、モーツァルト等の宗教曲やベートーヴェンの「第九」のソリストとして多数出演。オペラでは「ヘンゼルとグレーテル」のヘンゼル、「ワカヒメ」のカツラギを演じる。

現在、中国二期会会員。せせらぎコーラス、妹尾コールリレー、就実女子大学・短期大学グリークラブ指揮者。岡山ポリフォニーアンサンブルヴォイストレーナー。児島看護高等専修学校講師。



松本 俊雄 (Matsumoto Toshio)

Ten (岡山)

愛知県立芸術大学音楽学部、声楽科卒業。バルディ・睦子、イタリアのムジカ・リヴァでミエッタ・シーゲル、ヴェリアーノ・ルケッティに師事する。サンタ・マルゲリータで2位受賞。

オペラ「ワカヒメ」「ボエーム」「トスカ」「フィガロの結婚」「魔笛」等多数出演。

また、バッハ「ヨハネ受難曲」の福音史家をはじめ、ベートーヴェン「第九」、プッチーニ、シューベルトのミサ曲のテノール・ソロ等、合唱曲、宗教曲にも取り組む岡山を代表するテノール歌手。



小原 浄二 (Obara Joji)

Bas (岡山・高知)

盛岡市出身。岩手大学卒業後、東京芸術大学に進学し首席で卒業。松田トシ賞受賞。同大学院修了。声楽を佐々木正利、伊藤亘行、多田羅迪夫、H.クレッチマルの各氏に師事。芸大在学中は、小林道夫氏のもとバッハカンタータクラブに所属し研究・演奏を重ねる。卒業後は主に宗教曲のソリストとして国内外で活躍。92～94年、バッハコレギウムジャパンのコーラスマスター及びソリスト。94～95年、ドイツに留学し各地で演奏活動を行う。最近では、新日フィル定期公演におけるG.ボッセとの共演や、世界的宗教音楽の名指揮者であり、歴代トーマス教会カントールの、H.J.ロツチュ、G.Ch.ビラー等との共演で高い評価を得ている。現在、高知大学教育学部助教授。高知バッハカンタータフェライン指揮者。アンサンブル「BWV2001」メンバー。



小原 伸枝 (Obara Nobue)

Alt (高知)

岩手県釜石市出身。岩手大学及び東京芸術大学卒業。同大学院修了。声楽を佐々木正利、伊藤亘行、伊原直子の各氏に師事。NHK・FM洋楽オーディション合格。芸大在学中はバッハカンタータクラブに在籍し、小林道夫氏のもと研究・演奏を重ねる。92～94年、バッハコレギウムジャパンに所属し、カンタータ連続演奏会等で多くのソロを歌う。94～95年、ドイツ留学。H.クレッチマル氏に師事するとともに多数の演奏会においてソリストを務め絶賛される。帰国後も全国各地に招かれソロ活動を行い高い評価を得ている。現在、高知大学教育学部非常勤講師。高知バッハカンタータフェライン、アンサンブル「BWV2001」各メンバー。

仙台宗教音楽合唱団



創立以来35年間、一貫して「宗教音楽」、特にドイツ・バロック期の宗教曲を中心にすえて活動。1982年以降は佐々木正利を常任指揮者に迎え、バッハのヨハネ、マタイ両受難曲、ロ短調ミサ曲、カンタータ等に加え、シュッツ、ヘンデル、モーツァルトなどの、いわゆる「古典」とされる作品から、

近現代の無名に近い、しかし綺羅星の如き様々な作品を演奏している。作品の本質に迫るためには、「歌詞の深い理解とそこに込められたメッセージへの共感」を十全に表現することが大切であり、そのためにはまず「正確な発音、訓練された発声」と「正しい様式感」が不可欠という、

佐々木正利の指導のもと、さまざまなバックグラウンドを持つ団員が会して、演奏会を目指し練習を重ねている。

常任指揮者	佐々木正利
ピアニスト	東浦 綾郁
ヴォイストレーナー	中野 寛司

ソプラノ

青瀧 憲子
飯淵 正子
石沢 悦子
*尾友 佳子
木村 文子
後藤 直子
佐々木玲子
鈴木まゆみ
鈴木理恵子

アルト

曾野部郁子
千葉 悦子
●豊崎 幸代
中井千佳子
中嶋 帝子
中村 美香
☆畑山 由佳
広瀬 妙子
古瀬 笑子
三沢さやか

テノール

湊 久子
本良いよ子
*渡辺真理子
木下 純子
柴田 映子
清水 光
下河原貴子
●鈴木 英美
松田 保子
水戸由貴子
矢野 道子
大友 利恵
小澤 美紗

バス

有馬 純和
*鏡 貴之
兼平 雅彦
河原 清
川村 博敏
菅野松佐登
高瀬 重嗣
★●中村 洋
長谷川真吾

バス

福原 明敏
藤澤 良和
渡辺 伸作
●大宮 一弥
岡田 光晴
片倉隆太郎
木下 剛
後藤田篤夫

テノール

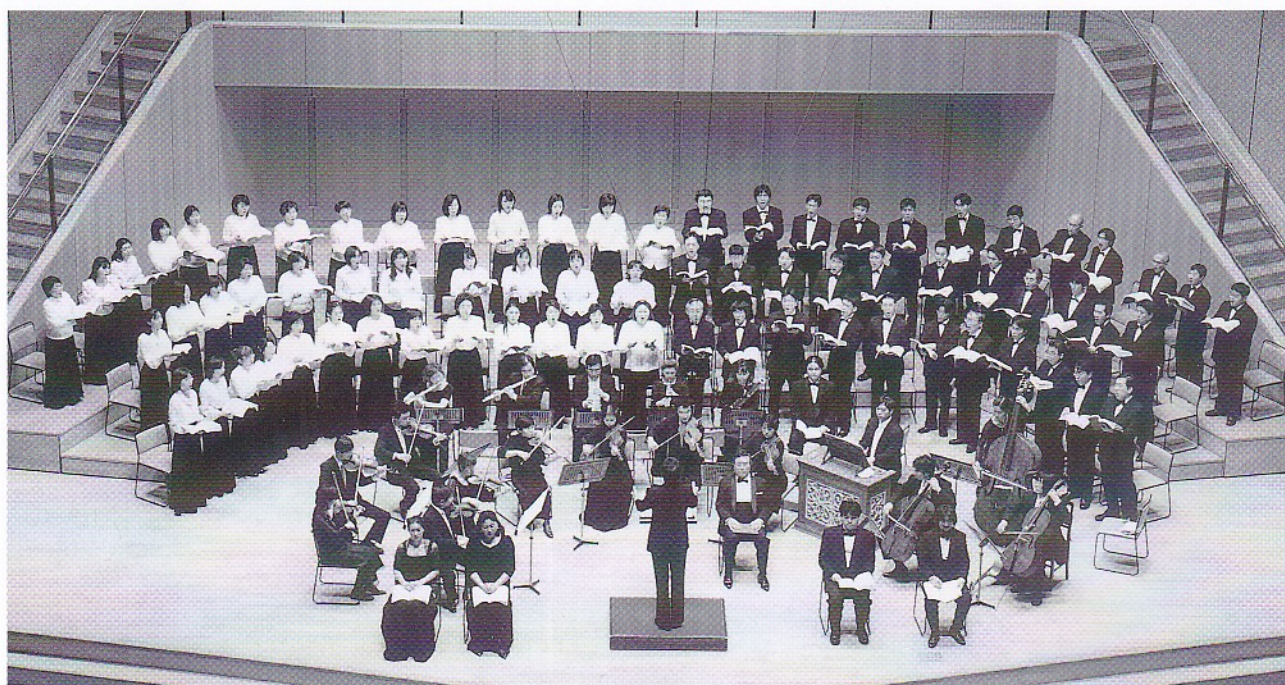
佐久間良樹
佐々木健一
杉井 智一
巽 明彦
藤田 俊一
松橋 清
水野 郁夫
米田章太郎
若林 敦盛

☆ 第1コンサートマスター

★ 第2コンサートマスター

● パートリーダー

* 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン



1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「言葉が生きて音楽が生きて」とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H.ヴァンシャーマン、H.J.ロッツェ、J.ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しようとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドン

の「天地創造」を演奏する(ニュルンベルク交響楽団)同じ週に、各地教会でアカペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

一昨年11月には、盛岡でH.ヴァンシャーマン指揮のドイツ・バッハザリステンと、バッハの「クリスマス・オラトリオ」を全曲演奏し絶賛を博した。また昨年10月には、K.マズア指揮ロンドンフィルハーモニー管弦楽団のベートーヴェン「第九交響曲」にパイオニア合唱団と共に出演し、大きな感動を呼んだことは記憶に新しい。

指揮者
伴奏者

佐々木正利
剣持 清之

ソプラノ

●赤塚 温子
浅沼 友絵
阿部未佳子
阿部友紀子
荒田 奈美
五十嵐祐子
石岡 裕子
岩井花文枝
Ellen Wieman
大石 敦子
大川 敦子
大矢 克子
小笠原香澄
小澤めぐみ
尾友 佳子
小野寺貴子

菊池 節子
熊谷 充代
斎藤 純子
佐藤 詩織
佐藤 千砂
鹿内 夏子
菅原 亜希
高橋 聡子
高橋 祐圭
田口千紗都
千葉明日香
竹森美映子
玉山 奈々
●田村いづみ
丹野 貞子
千田 雅子
豊岡 真実

軒 多賀子
松森 綾子
藤崎 美苗
藤澤 智子
松尾光穂子
三原 佳織
村上 育子
矢幅 嘉子
山崎みどり
○横内 愛理
○渡辺真理子

アルト

東 加奈子
伊藤 三恵
扇田 暁子
太田 美佐

岡田 ゆみ
●小川 暁美
小川 暁子
小田島千恵
小野寺洋子
金子 千鶴
兼田紀美子
菊池 敏子
●菊池 葉子
桐原 絹子
○工藤 由紀
小林 由美
今野 早苗
佐々木美智子
佐藤 公
佐藤 恵
杉本 絵美

鈴木栄見子
高橋 温
武田 敏恵
丹野 まり
千田加代子
千葉ゆつき
原 穂波
平井 良子
廣瀬利津子
廣田 幸子
福田 祐子
○細田 彩子
村上 殖子
茂木 容子
守口由美子
谷地敬晶子
渡辺しをり

テノール

伊藤 勝元
岩崎雄一郎
太田 穎則
小川 隆弘
●小山内 薫
○鏡 貴之
柿崎 倫史
加藤 照道
金野 達徳
斎藤 健
●嵯峨 文裕
佐々木和義
佐々木朋也
☆佐々木幹雄
佐藤 修
柴田 幸吉

高橋 真哉
○徳山 欣也
中川 喜之
中野 寛司
三原 正敏
目黒 賢哉
吉村 哲

バス

○赤坂 浩史
赤塚 貴史
東 勝
大友 拓磨
☆小原 一穂
後藤 頼男
佐々木直樹
佐藤 和久

佐藤 浩紀
下田 潤
高橋 聡
田沢 隆
千田 敬之
●芳賀 郁夫
藤村 誠毅
松岡 静一
○水野 郁夫
大和 敏恵
●横山 泉
吉田 俊彦
*若林 敦盛
渡辺 信之

☆ コンサートマスター

● パートリーダー

○ サブパートリーダー

* 仙台宗教音楽合唱団



岡山バッハカンタータ協会



1987年、バッハの合唱音楽の演奏を目的に結成。日本を代表するバッハ演奏のスペシャリストである佐々木正利氏を指揮者に迎えて現在に至る。

1994年、東京カザルスホールでの演奏会では“真摯で正攻法の演奏”“明快なフレージングとはっきりとしたドイツ語発音による豊かな表現力”との高い評価を獲得し、ソロも全て団員が受け持つゾリステンとして確立する。

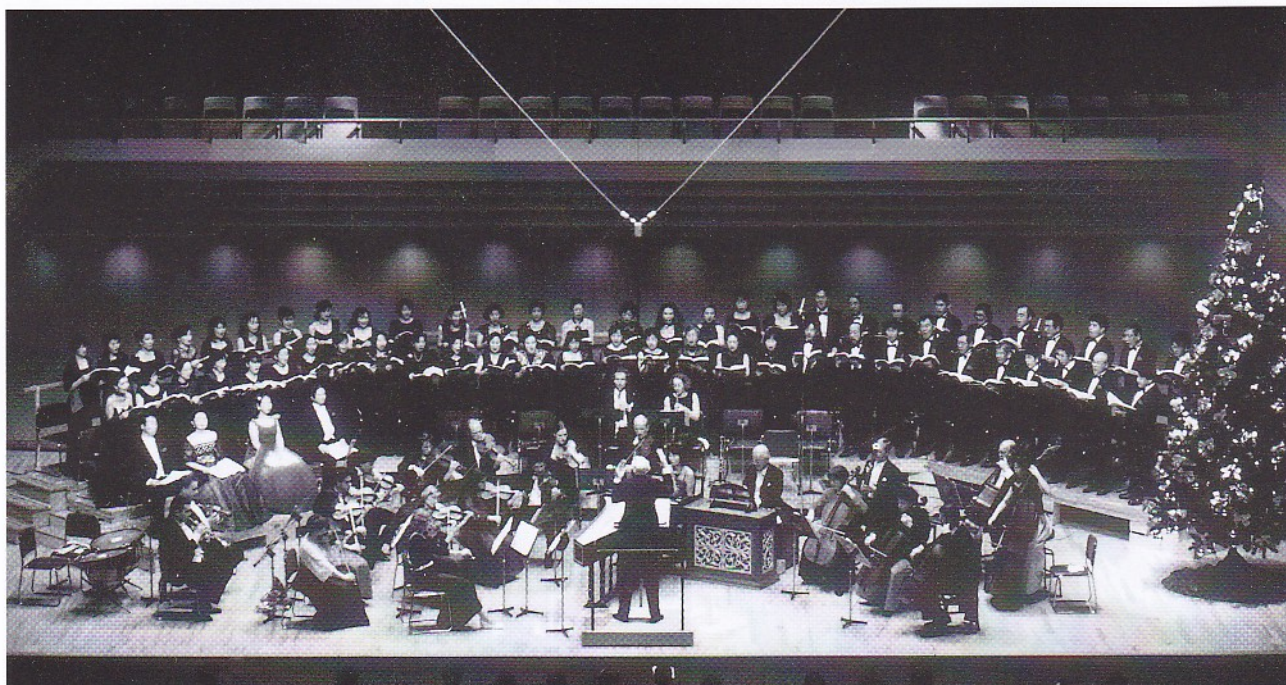
バッハ演奏の世界的権威であるヘルムート・ヴィンシャーマン指揮・ドイツ・バッハゾリステンと、1993年「マタイ受難曲」、1995年「ヨハネ受難曲」、1998年「ロ短調ミサ曲」、2000年「クリスマス・オラトリオ」を岡山、大阪、東京等で共演。いずれもこのライブCDが発売されている。他、イギリスのパロックブラスやアンサンブル金沢等と共演。2000年「クリスマス・オラトリオ」の演奏に対して第2回岡山県芸術文化賞

グランプリを受賞。1997年ドイツ、オーストリア演奏旅行。次いで2001年8月には、バッハゆかりのライブツィヒ・聖トーマス教会と、世界遺産の町・クヴェトリンブルクのシュテフツ教会でライブツィヒ・パロックオーケストラと共演。

合唱指揮者	大塚 博
ピアニスト	大熊 直子

ソプラノ	小島 裕子	福田 順子	草薙 裕子	矢内 淑子	草薙 隆文	今城 保
井上 令子	小前 珠緒	柳井むつみ	剣持美和子	数井 由佳	佐藤 友哉	日下不二雄
遠藤賀代子	実成 文	山下愛由子	小西 和美	山田 宏美	林 真一	坂本 尚史
岡崎 順子	新谷 葉子	山本 温子	小山 邦枝	脇本 恵子	松本 敏雄	高原 景介
岡野 恭子	玉垣夫規子	*渡辺真理子	友保美代子		山崎 泰弘	田辺 真一
大庭 雅子	出口 裕子		原田日眞子	テノール	山下 和宏	難波 晃
奥村 礼子	長尾 節子	アルト	虫明 和子	大熊 政次		新田 哲弘
*尾友 佳子	平松 英子	太田 陽子	村山 紀子	*鏡 貴之	バス	前島 峻仁
金子 晴美	広田 准子	河原井蔦枝	森神奈津恵	川口 慶行	井上 清光	小原 浄二 (賛助出演)

* 盛岡バッハカンタータフェライン



高知バッハカンタータフェライン



“土佐の地にもバッハを”の想いから、1997年4月、J.S.バッハを中心としたバロック期の声楽作品を研究・演奏することによって、高知にその時代の音楽を提供し、普及することを目的として創立される。

1998年3月以来、年1回の演奏会では、

J.S.バッハ、H.シュッツ、C.モンテヴェルディなどの作品を取り上げる。本年4月の創立5周年記念演奏会では、J.S.バッハ作曲「ヨハネ受難曲」を高知で初演。

創立にたずさわり、以来指導にあたっている小原浄二の、歌・音楽に寄せる熱

い想いを共有すべく集まったメンバーは、作品のもつ素晴らしさをより深く知るために、また、そのことを表現するために研鑽を積んでいる。

指揮者

小原 浄二

ソプラノ

池 佳代
井村 安里
大野 陽子
岡田 直子
☆●岡村知由紀
岡本 光世
岡本 美穂
*尾友 佳子
金子佐有子
北岡富士子

小松 美貴
佐藤 綾
篠原依里子
角 博子
千葉 美加
坪内 千里
寺岡 鮎子
徳弘 有希
中山 愛
新田 綾
原 雅子

藤澤真由子
藤原 久子
松下 美保
宮崎 佐恵
山中知佐乃
吉田 鈴香
好原 妙
*渡辺真理子

アルト

味府 美香

石渡 明枝
大石 陽子
岡 歩美
小原 伸枝
●小村 知子
岸の上礼子
酒井 理早
土居 安子
永野美智子
馬場 洋子
福井 利彩

松岡 佐紀
松村 友子
横田佳代子
横田なをみ

テノール

上杉 清仁
☆●斎藤 純
*鏡 貴之
○佐々木正利
杉本 達矢

高橋 伸明
竹田 光宏
武山 忠生
能勢 朋典
古田 貴喜
三浦 光雅

バス

稲葉 正俊
小原 浄二
柏井 啓嗣

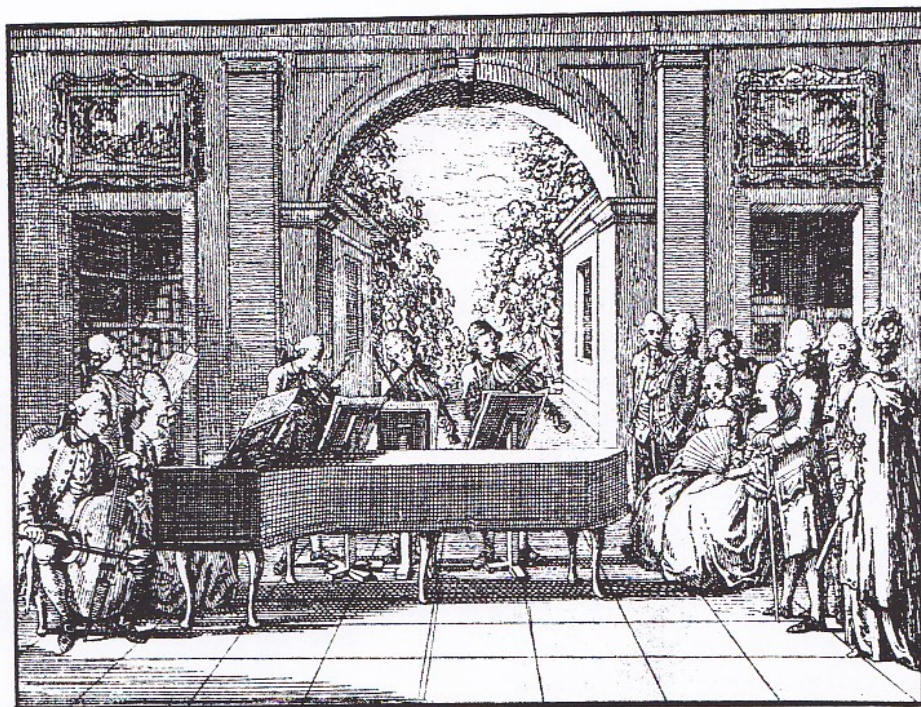
金子 宜正
斎藤 圭晃
佐藤 慶太
下元 孝俊
寺尾 孝太
中川 良介
●中村 隆太

☆ コンサートマスター

● パートリーダー

○ 賛助出演

* 盛岡バッハカンタータフェライン



楽曲解説

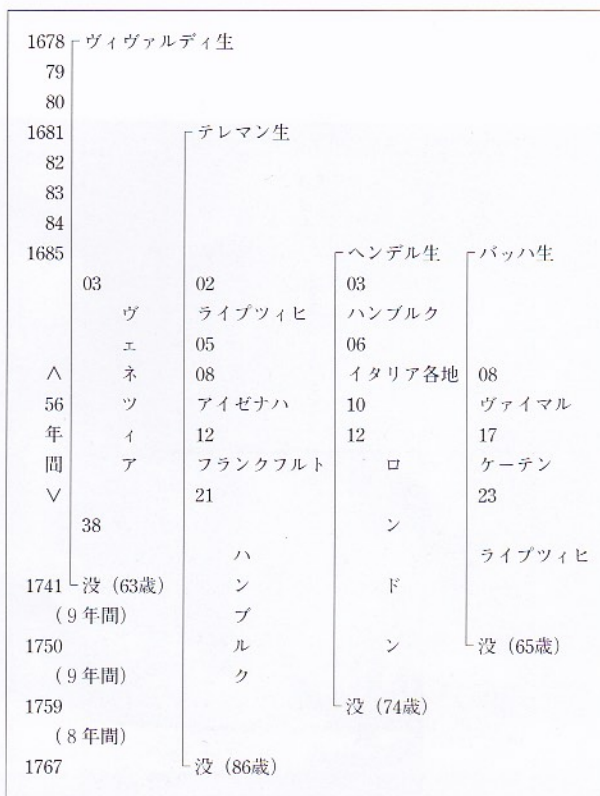
盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサート・マスター
佐々木 幹雄



バロック時代の「作曲家」

音楽を創作する者、今日で言う「作曲家」は、この時代においては「作曲家」として身を立てていたのはごくわずか、その多くは教会あるいは宮廷に仕える身であった。教会においてはオルガニスト(礼拝においてオルガンを演奏する)やカントル(教会における音楽監督)の仕事の一部として、あるいは宮廷におけるオルガニストや宮廷楽長などの仕事の一部として作曲という仕事をおこなっていたのである。従って作品のほとんどは礼拝や式典といった何らかの機会のために作られたものであり、古典派以降の作曲家に見られるような個人の思想の表現である「芸術作品」として創作されたものはごくわずかであった。今回のプログラムで取り上げるA. ヴィヴァルディ、G. Ph. テレマン、G. F. ヘンデル、J. S. バッハという4人の作曲家も教会や宮廷に仕えたり音楽教師として孤児院などに勤めたりしながら作曲を行っていた。

各人の生涯の詳細は他書にゆずるとして、はじめにこの4人が生きた時代がいかに関係しているかを見てみよう。以下に、生没年および主な活動都市名を図に示す。





G. Ph. テレマン (1681-1767)

このように、4人は56年間にわたって同時代を生きており、少なくとも三十数年間は音楽活動をしていた時期が重なる。また、それぞれが活動した都市には、ヘンデルがイタリア旅行の際に訪れたヴェネツィアを含め、ハンブルクやライプツヒといった当時の大都市の名前が見られる。

このことは、4人が互いに交流があった可能性を示している。実際、音楽的な交流について限っても、先輩格であるヴィヴァルディやテレマンの器楽曲をバッハは編曲しそこから協奏曲形式について学んでいるし、テレマンの曲からヘンデルがテーマを借用して自作を作っていること、また、ヘンデルの声楽曲や器楽曲をバッハが写譜していたことも知られている。このように、バロック時代の作曲家たちは互いに学び合いながら様々な様式についての書法を身につけていった。



《ヴァイオリンとトランペットのための協奏曲 二長調》

当時考えられるすべての楽器の組み合わせで協奏曲を作曲したと言われるテレマンによる、ヴァイオリンとトランペットのための協奏曲である。3楽章からなっている。

第1楽章はヴィヴァーチェ。冒頭はトランペットによる力強い付点のリズムで開幕し、続いてヴァイオリンが登場する。それぞれの楽器の特徴を活かした独奏楽器の旋律が見事である。短いながら様々な要素がコンパクトに詰まっている。

第2楽章はアダージョ。カンタービレ（歌うような）で印象的なヴァイオリンのテーマが、ユニゾンを基本とした簡素で動きの少ない伴奏楽器群との対比によって際立つ。トランペットは登場しない。

第3楽章はアレグロ。文字通り快活に動き回る音楽が展開され、ここでもそれぞれの独奏楽器の特性を活かした旋律が聴かれる。

《組曲(序曲) 八長調 「水の音楽—ハンブルクの潮の満干—」》

1723年、テレマン42歳の年に行われた祝典であるハンブルクの海軍省の百年記念祭のための音楽。10の楽章からなり、祝典にふさわしいとされていたフランス風の序曲によって開幕し、続く9つの舞曲では当時好まれたバロックの音画的な手法による風や波の描写を行っている。舞曲には主題的な標題(カッコ内)が同時代人の筆記によってつけられているがテレマン自身によるものかどうかは確実ではない。

I. 序曲

緩・急・緩の構成。落ちついた音楽で始まり、中間部でわくわくと心躍るオーボエとの協奏的な音楽となる。

II. サラバンド(眠るテーティス)

ブロック・フレーテ2本が入り、夢見心地のようなゆったりとした音楽。

III. プレー(目覚めるテーティス)

華やかで軽やかなプレーのリズムに乗って、上向の第1動機が伸び上がる。引き続きブロック・フレーテ2本が入る。

IV. ルール(恋に落ちたネプチューン)

落ちついた足取りの音楽。ロマンティックな淡い恋の雰囲気。気が漂う。

V. ガヴォット(踊る泉の精たち)

軽快なテンポ。全体に中・低音域で動き、妖精たちが幻想



的に踊り回るようである。

Ⅵ.道化(戯れるトリートン)

再び華やかさが戻る。付点のリズムの動機が際立つ。

Ⅶ.メヌエット(吹きすさぶ風)

音画的な表現。遠くから風が向かってきて吹き抜けていく、波の上を渡る風や巻く風のようなものである。

Ⅷ.メヌエット(快い西風)

ゆったりとした気分で風に吹かれているようなメヌエット。

Ⅸ.ジグ(潮の干満)

充ちてくる潮の様子を音画的に表現している。音楽の終わりに向かってしだいに弱まっていく。

X.カナリー(愉快的舟人たち)

「カナリー」とはカナリー諸島の原住民の踊りをまねた17世紀フランスのダンス。素朴さを残した2拍子の楽しい舞曲。

《3つのヴァイオリンのための協奏曲 ヘ長調》

ターフェルムジーク第2集より

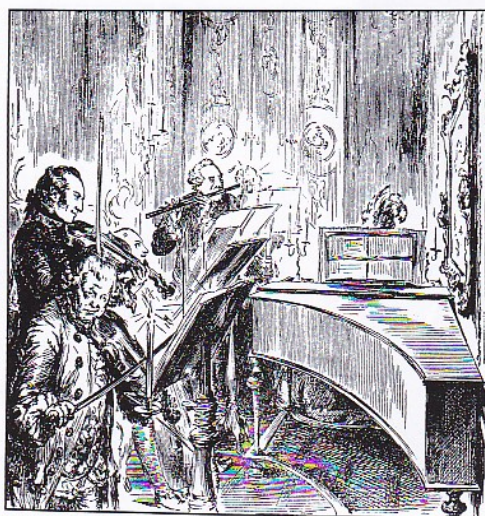
この協奏曲は1733年に出版された3集からなる《ターフェル・ムジーク》(食卓の音楽)の第2集に組まれている。音楽は比較的平易で、合奏の高等技術の養成のためでなく、室内楽を楽しむために書かれたと考えられている。しかし、17世紀以降の家庭音楽に欠かせない声楽曲を含んでいないことや編成の大きなものもあることから、当時活発に行われるようになってきた公開の演奏会も意図していたのではないかと考えられている。

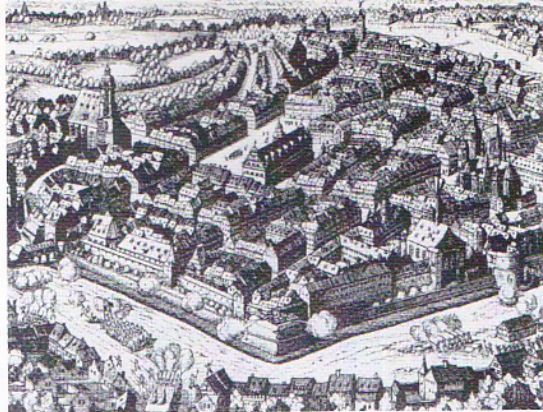
各集は、序曲(組曲)、四重奏曲、協奏曲、トリオ・ソナタ、ソロ・ソナタ、終曲という順に楽曲が配置されている。また、フランス様式が支配的ではあるが、イタリア、ドイツ、ポーランド音楽の要素も含まれており、汎ヨーロッパ的な音楽とも言える。当時販売にあたっての予約者リストにはヨーロッパ全土から計206人の名前があり、中にはロンドン在住のヘンデルの名前もある。現にヘンデルはこの曲集から16の動機を借用して自分の作品を創りあげている。

《ターフェル・ムジーク》という曲集名は1620年頃からすでに使われており、テレマンのオリジナルな命名ではない。テレマンは、食卓を彩る変化に富んだコース料理のような器楽曲といった意味を込めていたのかもしれないし、「組曲」や「協奏曲」より《ターフェル・ムジーク》の名のほうがよく売れるのではないかと考えていたのかもしれない。

第2集では、全体を通してヴァイオリンが中心楽器として選ばれている。本協奏曲は基本的には合奏協奏曲(コンチェルト・グロッソ)の形式を用い、コンチェルティーノ(独奏部)は3声となっている。

急一緩一急の3楽章からなるイタリア風協奏曲の様式。第1曲はアレグロ。トゥッティが5回繰り返される間に3つのヴァイオリンによる技巧的なコンチェルティーノが織り込まれるリトルネッロ形式。第2曲はラルゴ。調性は二短調で、3つのヴァイオリンが静かに語り合う。第3曲はヴィヴァーチェ。3/8拍子でポリフォニックな全奏(トゥッティ)をもつリトルネッロ形式でかかれている。





G. F. ヘンデル (1685-1759)

《6つの合奏協奏曲 作品3から 変ロ長調》

一般にヘンデルの合奏協奏曲として知られているのは《12の合奏協奏曲 作品6》(1739年)であるが、この《6つの合奏協奏曲 作品3》は1734年にロンドンで初版が出版されたもので、今日では通称《オーボエ協奏曲》の名で知られている。基本的にオーボエ2管とヴァイオリンのための独奏協奏曲の形式でかかされている。

●第1番

1.アレグロ(変ロ長調)

トゥッティ(全奏)によるテーマの提示で始まる。2つのオーボエ、オーボエとヴァイオリン、そしてヴァイオリンというように独奏楽器が変化する。

2.ラルゴ(ト短調)

2つのブロック・フレーテ、オーボエとヴァイオリンが協奏し、低音にはファゴットが加わり、部分的に弦楽によるトゥッティが入る。

3.アレグロ(ト短調)

トゥッティではじまり、2本のファゴットによるデュエットを含む。

●第2番

1.ヴィヴァーチェ

付点のリズムのトゥッティ(全奏)と軽快に動き回る2つのヴァイオリンによるコンチェルティーノ。しだいに動きは他の楽器へと広がっていく。終末部でテンポがゆっくりとなる。

2.ラルゴ

2つのチェロのうごめく波のようなデュエットに、歌うようなオーボエの旋律が加わる。リビエーノの楽器群は背景へと退く。

3.アレグロ

4声の二重フーガ。原曲は鍵盤楽器のためにかけられた。

4.メヌエット

オーボエとファゴットがコンチェルティーノとして音楽を先導し弦楽器が伴奏する、かわいらしいメヌエットである。

5.ガヴョット

同じく木管楽器と弦楽器が対話しながら進む、楽しげなガヴョットである。

J. S. バッハ (1685-1750)

《ブランデンブルク協奏曲 第5番 二長調》
BWV1050

ベルリンに住むブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに献呈されたこの協奏曲集は全6部に及ぶ。成立は、バッハがケーテンの宮廷で新しいチェンバロを入手した1719年前後と考えられている。最終稿には1721年付けの署名があり、表題はフランス語で《種々の楽器を伴う協奏曲》と書かれている。これはイタリアにおける《合奏協奏曲》(コンチェルト・グロッソ)と言えよう。

この第5番については、バッハがチェンバロを演奏し、バッハが抜けたヴィオラのパートを補うために第2ヴァイオリンがそのパートを演奏したと考えられている(そのため、総譜にはヴァイオリンのパートは1つしかない)。独奏楽器はフラウト・トラベルソとヴァイオリン、それにチェンバロである。特にチェンバロのパートが独創的で、通奏低音としての数字譜の部分はごく僅かで、ほとんどの部分に演奏すべき音符が書かれている。つまり、チェンバロ・パートとして通奏低音から独立しているであり、その意味で「史上初のチェンバロ協奏曲」ともいわれる。

第1楽章はアレグロ、2/2拍子。躍動的なトゥッティによる主題提示部で始まり、部分部分に豊かな楽想の独奏部が顔を覗かせる。終盤には、チェンバロのカデンツァが65小節にわたって登場し(初稿(BWV1050a)では19小節だった)、主題の変形からしだいにトッカータ風のフレーズへと変化していき、高い音楽的緊張のうちに終末のトゥッティを導く。

第2楽章は4/4拍子で「アフエットウオーソ」と指定されている。これは「感情を込めて、情緒豊かに」といった意味である。3つのソロ楽器によるトリオ・ソナタで、チェンバロの右手が第3のソロ旋律として登場する。

第3楽章はアレグロで2/4拍子。ジークの舞曲のリズムに乗ったフーガが楽しげに響き合う。中間部ではロ短調になり、カンタービレ(歌うように)と書き込まれた旋律が登場する。ソロとトゥッティ、重奏とユニゾン、チェンバロと他の楽器といった様々な対比によって音楽が運ばれ、冒頭主題にダ・カーポして協奏を終える。

A. ヴィヴァルディ (1678-1741)

《グローリア ニ長調》RV.589

この作品の作曲は1725年、あるいは1715年とも考えられており、その成立過程は定かではない。カトリックのミサ通常文の中の「グローリア」全体に1つの曲をつけたのではなく、テキスト(歌詞)を12に区切って、それぞれのアフェクト(情感)に応じて作曲したことから、カンタータのような形式となっている。

冒頭は天の神の栄光を高らかに讃美するような軽快なテンポと弾んだリズムによるホモフォニー(和声的音楽)、そしてトランペットを伴った音楽が展開する。続いて、地上への平和の祈りがゆったりとした3拍子のポリフォニー(対位法的音楽)で弦楽のみを伴っ

て歌われる。ここには天と地の対比がみられる。第3曲(Laudamus te)ではソプラノ二重唱が軽快な2拍子で主を誉め讃える。続く第4曲では6小節と短いながら重厚なハーモニーで感謝を表し、第5曲ではポリフォニックに偉大なる主を讃える。第6曲ではソプラノ独唱がオーボエのオブリガートを伴って、シンプルな響きの中で父なる神への愛情を表現し、第7曲では神の一人子イエスを明るい調子で讃え、第8曲ではアルト独唱に合唱がからみ、一転して内的な音楽となる。第9曲では再びホモフォニックな厚い響きとなり、第10曲ではアルト独唱と弦楽によって、主にあわれみを願う。第11曲では再び冒頭のテーマに戻りトランペットも参加して唯一の主イエスを讃え、壮大なポリフォニーによる讃美の音楽である終曲へと続く。

Antonio Vivaldi (A. ヴィヴァルディ)

Gloria RV. 589 (グローリア)

対訳: 仙台宗教音楽合唱団 若林教盛

- | | |
|---|---|
| 1. Gloria in excelsis Deo. | 1. 高き所では神に栄光がありますように。 |
| 2. Et in terra pax hominibus bone voluntatis. | 2. そして地においては心善い人々に安らぎがありますように。 |
| 3. Laudamus te.
Benedicimus te.
Adoramus te.
Glorificamus te. | 3. わたしたちはあなたを賛美します。
あなたを祝福します。
あなたを崇拝します。
あなたを称賛します。 |
| 4. Gratias agimus tibi | 4. わたしたちはあなたに感謝します |
| 5. propter magnam gloriam tuam. | 5. あなたのたいなる栄光のために。 |
| 6. Domine Deus, Rex coelestis,
Deus Pater omnipotens. | 6. 主なる神よ、天の王よ、
全能の父なる神よ。 |
| 7. Domine Fili unigenite,
Jesu Christe. | 7. 主なる独り子よ、
イエス・キリストよ。 |
| 8. Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.
Qui tollis peccata mundi, miserere nobis. | 8. 主なる神よ、神の子羊よ、父の子よ。
世の罪を取り除く方よ、わたしたちを憐れんでください。 |
| 9. Qui tollis peccata mundi,
suscipe deprecationem nostram. | 9. 世の罪を取り除く方よ、
わたしたちの願いを受け入れてください。 |
| 10. Qui sedes ad dexteram Patris, miserere nobis. | 10. 父の右に座る方よ、わたしたちを憐れんでください。 |
| 11. Quoniam tu solus Sanctus,
tu solus Dominus,
tu solus Altissimus,
Jesu Christe. | 11. 唯あなたが神聖であり、
唯あなたが主であり、
唯あなたが至高なる方なので、
イエス・キリストよ。 |
| 12. Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris.
Amen. | 12. あなたは聖霊と共に父なる神の栄光のうちにあります。
アーメン。 |

《カンタータ第150番「主よ、わたしはあなたを求めています」》 BWV150

このカンタータは、作曲様式から1708年以前に作曲された初期のものと考えられている。器楽編成は弦楽合奏、通奏低音、そしてファゴットのみの小規模である。詩篇第25篇をテキストの基本とし、それを合唱が歌い継ぐ間に自由詩（作者不詳）によるアリアがはさまれる。キリスト者が現世における苦難の中で神を信じその救済を待ち望む心情が中心テーマとなっている。

第1曲（アダージョ、ロ短調、4／4拍子）は器楽のみによるシンフォニアで、続く第2曲合唱の半音階下降テーマを先取りしている。第2曲は合唱で、第1曲から引き続きアダージョのロ短調で始まり、以降、テキストに応じて短い単位で曲趣が変化する。ポリフォニーとホモフォニーが交替しながら最後のフーガに向かうという構成は、バッハのオルガン曲にみられる「プレリュードとフーガ」に類似する。冒頭に示される半音階下降テーマは、主を仰ぎ見る「わたし」のあこがれ（8度跳躍）と現世の苦難（半音階下降）を象徴する。

第3曲（ロ短調、4／4拍子）のアリアでは「厳しい現世ではあるが正義を備えた僕である私はそれに満ち足りている」とソプラノが歌う。テキストの語句に対応した音楽が丁寧に書かれている。第4曲（アンダンテ、ロ短調）の合唱は第2曲と同じように短い単位で曲趣が変化するスタイルである。ただし、第2曲で聴かれたような苦難

を示す半音階的な音形に変わって、全音階的な進行が支配する。冒頭で「leite（導いて下さい）」が合唱4声部とヴァイオリン2声部の計6声部によって3オクターブにわたって音階のように上昇させることで「神の導き」を表現したり、後半で「harre（待ちこがれる）」を長く引き延ばすことで「ひねもす待ちこがれている」ことを表すなど、歌詞を象徴的に扱っている。

第5曲（ニ長調、3／4拍子）では嵐を象徴し動き回るファゴットの低音の上で、アルト、テノール、バスの三重唱が確かな歩みで歌われる。続く第6曲（ニ長調、6／8拍子）は主に向かう「わたし」のまなざしをホモフォニックに、後半（アレグロ、ロ短調）では「主が現世の様々な苦難から救ってくださる」と確信に満ちたフーガで表現する。

最後の第7曲（チャコーナ、ロ短調、2／3拍子）は自由詩をテキストとする合唱である。シャコンヌの低音テーマが22回繰り返され、その低音の上で多様な変奏が展開する。はじめは合唱がホモフォニックに、続いて4人のソロがテキストを引き継ぎ、後半には合唱が模倣的に歌い継いでゆく。それによって「イエス・キリストの助力によって苦しみの日々に打ち勝つことができる」という確信が高まる中で終末をむかえる。J. ブラムスが『交響曲第4番』（1885）の第4楽章のテーマとしてこのシャコンヌ主題を用い、様々な変奏を書いていることは有名である。

Johann Sebastian Bach (J. S. バッハ)

KANTATE NR. 150 (カンタータ 150番)

Nach dir, Herr, verlangst mich (主よ、わたしはあなたを求めています)

対訳: 仙台宗教音楽合唱団 若林敦盛

1. [Sinfonie]

2. [Chor]

Nach dir, Herr, verlangst mich.
Mein Gott, ich hoffe auf dich.
Lass mich nicht zuschanden werden,
dass sich meine Feinde nicht freuen über mich.

3. [Sopran Arie]

Doch bin und bleibe ich vergnügt,
Obgleich hier zeitlich toben
Kreuz, Sturm und andre Proben,
Tod, Höll und was sich fügt.
Ob Unfall schlägt den treuen Knecht,
Recht ist und bleibt ewig Recht.

4. [Chor]

Leite mich in deiner Wahrheit und lehre mich;
denn du bist der Gott, der mir hilft,
tätlich harre ich dein.

1. [シンフォニア]

2. [合唱]

あなたのことを、主よ、わたしは求めています。
わたしの神よ、わたしはあなたに望みを持っています。
わたしを罪で汚させないでください、
わたしの敵たちがわたしの事で喜ばないように。

(詩編 第25章 第1節～第2節)

3. [ソプラノ・アリア]

けれど、わたしはいつも満足しています。
たとえ、ここ現世で
十字架、嵐、その他の試練や、
死、地獄そして偶然の出来事が荒れ狂おうとも。
たとえ災いがこの忠実な僕を打っても、
わたしには正義があり、この正義は永遠に正義であり続けるのです。

4. [合唱]

わたしをあなたの真理へと導き、そして分らせてください。
あなたはわたしを救う神なのですから。
日々、わたしはあなたを待ちわびています。

(詩編 第25章 第5節)

5. [Alts, Tenors & Basses Terzett]
 Zedern müssen von den Winden
 Oft viel Ungemach empfinden,
 Oftmals werden sie verkehrt.
 Rat und Tat auf Gott gestellt,
 Achtet nicht, was widerbellet,
 Denn sein Wort ganz anders lehrt.

6. [Chor]
 Meine Augen sehen stets zu dem Herrn;
 denn er wird meinen Fuss aus dem Netze ziehen.

7. [Ciaccona]
 Meine Tage in dem Leide
 Endet Gott dennoch zur Freude;
 Christen auf den Dornenwegen
 Führen Himmels Kraft und Segen.
 Bleibet Gott mein treuer Schutz,
 Achte ich nicht Menschen trutz,
 Christus, der uns steht zur Seiten,
 Hilft mir täglich sieghaft streiten.

5. [アルト、テノール&バス・三重唱]
 杉は風によって
 たびたび多くの災難を感じ、
 しばしば倒されることもあります。
 神によって示された忠告と行いは
 それに反してわめき立てるものを気に留めません。
 なぜなら彼の言葉は全く別の仕方では教えているのですから。

6. [合唱]
 わたしの眼はいつも主の方を見えています。
 彼はわたしの足を綱から引き出してくれる方なのですから。
 (詩編 第25章 第15節)

7. [チャコーナ]
 苦しみにあるわたしの日々を
 神は喜びへと終わらせてくれます。
 いばらの道にあるキリスト者を
 天国の力と勝利は導いてくれます。
 神はわたしの誠実な守護に留まり、
 わたしが人間の反抗心を重んじる事はありません。
 キリストはわたしたちの側に立って
 日々、勝利を確信して戦うのに力を貸しているのです。

J. S. バッハ (1685-1750)

《ミサ曲 イ長調》BWV234

バッハの「カンタータ風ミサ」(構造がカンタータに似ており、カンタータを原曲とするパロディによって書かれていることからこう呼ばれる)は4曲残されており、いずれも1730年代後半にライプツィヒで成立した。カトリックのミサ曲と違って、「キリエ」と「グロリア」からなっている。ただし、ルター派のミサではこのほかに「サンクトゥス」も必要とされ、バッハによるいくつかの「サンクトゥス」が残っている。

このイ長調のミサ曲は、他のカンタータ風ミサ同様6つの楽章からなっている。

第1曲「キリエ」は歌詞に応じて3部分に分けられる。最初の部分はテンポの指定はなく、ホモフォニックで付点のリズムを基調とした3拍子である。中間部の「クリステ・エレイゾン」は17小節ながらレチタティーヴォ風な動機を用いたポリフォニーで、「レント」と指定されている。続く「キリエ・エレイゾン」はヴィヴァーチェで3拍子のフーガで、最後にアダージョとなる。

第2曲「グロリア」はヴィヴァーチェ(4/4拍子)で神の栄光を讃え、アダージョ(3/4拍子)のパート・ソロによって地の平和を願う、

といったように歌詞に応じて音楽が姿を変え、最後に全パートの合唱によって感謝を歌う。BWV67の第6曲を原曲としている。

第3曲はバス独唱がヴァイオリン・ソロと通奏低音というシンプルな伴奏により、主とその一人子イエスを讃える。嬰へ短調、アンダンテ。

第4曲では2つのフラウト・トラベルソとユニゾンの弦楽器がソプラノ独唱を伴奏する。しかし通奏低音はつかない。清楚で浄化された響きの中で、主にあわれみを願う。口短調の3/4拍子で、原曲はBWV179の第5曲である。

第5曲のアルト・ソロでは前曲同様に弦楽器のユニゾンがオブリガートを演奏するが、フラウト・トラベルソは抜け、通奏低音が加わる。ニ長調の6/8拍子で、「ただ主のみ」を讃美する。BWV79の第2曲のパロディ。

第6曲は再びイ長調にもどり合唱となる。3小節の「グラエーヴェ」と指定された導入部に続いて、ヴィヴァーチェで12/8拍子の壮麗なフーガが展開する。BWV136の第1曲と共通の原曲からのパロディと考えられている。

Johann Sebastian Bach (J. S. バッハ)
Lutherische Messe (ルター派の為のミサ曲)
Missa A – Dur BWV 234 (ミサ曲 イ長調)

対訳: 仙台宗教音楽合唱団 若林敦盛

1. [Kyrie]

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

1

主よ、憐れんでください。
キリストよ、憐れんでください。
主よ、憐れんでください。

2. [Gloria]

Gloria in excelsis Deo.
Et in terra pax hominibus bone voluntatis.
Laudamus te.
Benedicimus te.
Adoramus te.
Glorificamus te.
Gratias agimus tibi
propter magnam gloriam tuam.

2

高き所では神に栄光がありますように。
そして地においては心善い人々に安らぎがありますように。
わたしたちはあなたを賛美します。
あなたを祝福します。
あなたを崇拝します。
あなたを称賛します。
わたしたちはあなたに感謝します
あなたの偉大な栄光のために。

3. [Domine Deus]

Domine Deus, Rex coelestis,
Deus Pater omnipotens.
Domine Fili unigenite,
Jesu Christe.
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

3

主なる神よ、天の王よ、
全能の父なる神よ。
主なる独り子よ、
イエス・キリストよ。
主なる神よ、神の子羊よ、父の子よ。

4. [Qui tollis peccata mundi]

Qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi,
suscipe deprecationem nostram.
Qui sedes ad dexteram Patris,
miserere nobis.

4

世の罪を取り除く方よ、
わたしたちを憐れんでください。
世の罪を取り除く方よ、
わたしたちの願いを受け入れてください。
父の右に座る方よ、
わたしたちを憐れんでください。

5. [Quoniam tu solus]

Quoniam tu solus Sanctus,
tu solus Dominus,
tu solus Altissimus,
Jesu Christe.

5

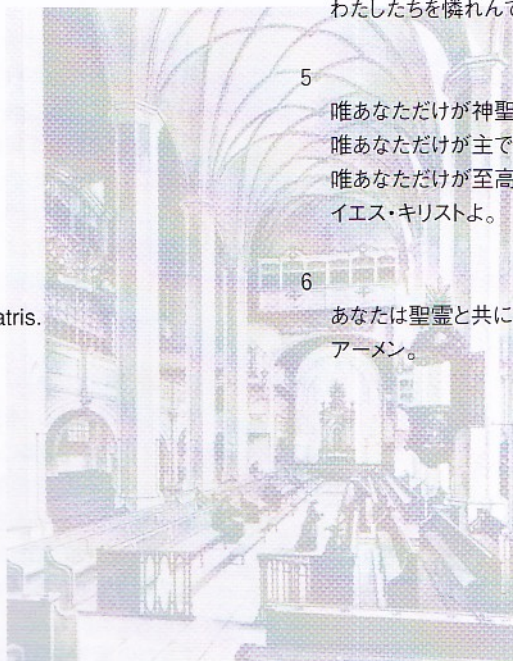
唯あなたが神聖であり、
唯あなたが主であり、
唯あなたが至高なる方なので、
イエス・キリストよ。

6. [Cum Sancto Spiritu]

Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris.
Amen.

6

あなたは聖霊と共に父なる神の栄光のうちにあります。
アーメン。



《カンタータ第45番「あなたには告げられています、人よ、何が善いものであるか」》BWV45

このカンタータは、バッハのライプツィヒにおけるカンタータ創作第3期(1725-1727)にあたる1726年8月11日(三位一体節後第8日曜日)にライプツィヒで演奏された。この日の礼拝のテーマは、「にせ預言者を警戒せよ」というマタイによる福音書第7章第15-23節である。テキストは『ルードルシュタット詩華撰』(1726)から採られ、冒頭に旧約聖書、中心に新約聖書、最後にはコラールが配置され、その間にレチタティーヴォやアリアが置かれるというシンメトリカルな配置が特徴である。第3曲のアリアまでの第1部と新約聖書のテキストによる第4曲以降の第2部に分けられてはいるが、音楽的には冒頭主題の動機によって全体が統一されている。

第1曲の合唱では、「主はすでに何が善いことなのか告げているのです」という預言の確認が、堂々としたポリフォニックなテーマで歌われ、続いて「善いこと」の内容をホモフォニックに説く。第2

曲のレチタティーヴォでは「(だから)恐れとへりくだりと愛」に、試練のように励もうと注釈を加える。第3曲のアリア(テノール)は舞曲のようなリズムではあるが、「責め苦と嘲りが罰として降りかかるのは、(神の御言葉を守り、愛を行い、神の前にへりくだるという)神への服従に背くときなのだ」と自分の心の中で激しく対話する。

第2部は、第4曲のイエスによる山上の垂訓における最後の審判についての言葉を歌うバスのアリオードで開始される。「主よ、主よ」という言葉ではなく、人の行いこそが大切なのだという権威に充ちた言葉である。続く第5曲のアリアでは、アルトとフラウト・トラベルソと通奏低音のトリオが、前曲の激しさと対照的に論ずような歩みで「心の底から信仰を表す者だけが救われるのだ」と語りかける。第6曲ではアルトが「結局、自分の口と心が自分自身を裁く。『善きこと』を行ってさえいれば、主は救ってくださるのです。」とまとめる。そして最後のコラールでは、「善きこと」を全うしようという決意とそれに対する主の恵みがありますようにという祈りが会衆のものとして歌われ、全編をしめくくる。

Johann Sebastian Bach (J. S. バッハ)

KANTATE NR. 45 (カンタータ45番)

Es ist dir gesagt, Mensch, was gut ist (あなたには告げられています、人よ、何が善いものであるか) 対訳: 仙台宗教音楽合唱団 若林敦盛

Erster Teil

1. [Chor]

Es ist dir gesagt, Mensch, was gut ist
und was der Herr von dir fordert,
nämlich: Gottes Wort halten und Liebe üben
und demütig sein vor deinem Gott.

2. [Tenors Rezitativ]

Der Höchste lässt mich seinen Willen wissen
Und was ihm wohlgefällt;
Er hat sein Wort zur Richtschnur dargestellt,
Wornach mein Fuss soll sein geflissen
Allzeit einherzugehn
Mit Furcht, mit Demut und mit Liebe
Als Proben des Gehorsams, den ich übe,
Um als ein treuer Knecht dereinsten zu bestehn.

3. [Tenors Arie]

Weiss ich Gottes Rechte,
Was ist's, das mir helfen kann,
Wenn er mir als seinem Knechte
Fordert scharfe Rechnung an.
Seele, denke dich zu retten,
Auf Gehorsam folgt Lohn;
Qual und Hohn
Drohet deinem Übertreten!

第1部

1. [合唱]

あなたには告げられています、人よ、何が善いものであり、
そして何を主があなたに求めているのか。
それはつまり神の言葉を守り、愛に励み、
そしてあなたの神の前で謙虚でいるということです。
(『ミカ書』第6章第8節)

2. [テノール・レツィタティーフ]

至高者はわたしにその意志を分からせ、
自分の意に合うことを教えました。
主は自分の言葉を規範として示し、
それによってわたしの足が勤勉に
いつも歩んでいくようにしてくれたのです。
畏れと謙虚さと愛とを
わたしが行う従順さの証しとして。
それによって忠実な僕としてあり続けられるように。

3. [テノール・アリア]

わたしは神の正しさを知っています。
何がわたしを助けることができるものなのかを。
神がわたしに自分の僕としての
はっきりとした責任を求めた時に。
魂よ、自分を救うことを思い、
従順に報いに従いなさい。
責め苦とあざけりが
あなたの過失を脅かすのだから!

Zweiter Teil

4. [Basses Arioso]

Es werden viele zu mir sagen an jenem Tage:
Herr, Herr!
haben wir nicht in deinem Namen geweissaget,
haben wir nicht in deinem Namen Teufel ausgetrieben,
haben wir nicht in deinem Namen viel Taten getan?
Denn werde ich ihnen bekennen:
Ich habe euch noch nie erkannt,
weicht alle von mir, ihr Übeltäter!

5. [Alts Arie]

Wer Gott bekennt
Aus wahren Herzensgrund,
Den will er auch bekennen.
Denn der muss ewig brennen,
Der einzig mit dem Mund
Ihn Herren nennt.

6. [Alts Rezitativ]

So wird denn Herz und Mund selbst von mir Richter sein,
Und Gott will mir den Lohn nach meinem Sinn erteilen.
Trifft nun mein Wandel nicht nach seinen Worten ein,
Wer will hernach der Seele Schaden heilen?
Was mach ich mir denn selber Hindernis?
Des Herren Wille muss geschehen,
Doch ist sein Beistand auch gewiss,
Dass er sein Werk durch mich mög wohl vollendet sehen.

7. [Choral]

Gib, dass ich tu' mit Fleiss,
Was mir zu tun gebühret,
Wozu mich dein Befehl
In meinem Stande führet!
Gib, dass ich's tue bald,
Zu der Zeit, da ich soll;
Und wenn ich's tu, so gib,
Dass es gerate wohl!

第2部

4. [バス・アリオーゾ]

その日には多くの人がわたしにこう言うだろう、
「主よ、主よ!
わたしたちはあなたの名前において預言し、
あなたの名前において悪魔を追ひ払い、
あなたの名前において多くの業を行なわなかったでしょうか?」
その時にはわたしは彼らにこう告げるだろう、
「わたしはおまえたちの事など知らない。
わたしから離れなさい、不法を行う者たちよ!」
(『マタイによる福音書』第7章第22～23節)

5. [アルト・アリア]

神を、本当に心の底から
知っている人、
その人の事を神は知っていてくれるでしょう。
なぜなら永遠に焼かれるべき人、
その人はただ口先で
神を主と呼んでいるだけなのですから。

6. [アルト・レツィタティーフ]

ですから心と口が自らわたしにとって裁き手となり、
神はわたしの心に應じて報いを与えるでしょう。
わたしの生き方が神の言葉と合致していなかったら、
誰が後にこの魂の痛みを癒してくれるでしょうか?
一体何故わたしが自分にとって障害となる事をするでしょうか?
主の意志は起きなければいけません。
主の助言は確かなものであり、
主は自分の行為がわたしによって十分に果たされるのを見ようとしているのですから。

7. [コラル]

お恵みを!わたしが勤勉に
自分が行うべき行為を行えるように。
その上であなたの命令がわたしを
この居場所にあって導くように!
お恵みを!わたしがすぐに、
その時すべき事を行えるように。
そしてわたしが行う時には、どうかお恵みを!
その行いがうまくゆくように!



使用チェンバロ

木村雅雄 1998年製作 ジャーマン チェンバロ
2段鍵盤、FF-f³、61鍵

